

.....
2017 年度第 1 号
2017年7月31日発行
.....

時間学公開学術シンポジウム 2017 を開催

去る平成29年6月10日（土）、山口学芸大学A棟4F大講義室にて時間学公開学術シンポジウム「多様な窓からこころを覗くー脳機能、脳構造、心理学から見えてくる心の時空間ー」を開催しました。

近年、工学的・数理科学的手法の発達に伴って、脳の活動や構造の可視化技術が目覚ましく発展し、従来では難しかった生きているヒトの脳活動や構造といった状態を客観的に観察することが可能となりました。急速に発達したこのような脳観測の新しい化学技術はこころや意識といった主観的な体験の科学的理解に何をもたらしてくれるのか、また、従来からこころを科学的に研究することを目指してきた心理学はこのような周辺化学の中でこころや意識の理解にどのような役割を担うことができるのか。多様で多角的な窓から覗くことによってこそ見えてくるこころの諸相について、異なるディシプリンで研究を進める新進

鋭気鋭の研究者3人がそれぞれの最新トピックについて講演を行いました。まず、天野薫先生（情報通信研究機構 脳情報通信融合研究センター・主任研究員）の講演では、ヒトの脳活動を非侵襲的に変化させる方法を用いて脳活動を任意に操作することで変化する主観的な体験についての研究が紹介されました。次に竹村浩昌先生（日本学術振興会特別研究員SPD情報通信研究機構 脳情報通信融合研究センター・特別研究員）の講演では、MRIを用いた新しい白質計測法と解析法の原理や、それを用いた白質の情報伝達経路の研究を紹介し、脳構造が私たちのこころや健康とどのように関わっているのかについて話されました。最後に寺尾将彦先生（山口大学時間学研究所・助教）が、心理物理学と呼ばれる心理学の手法を用い感じるすることができる主観的な「こころの時空間」が作り出される仕組みについての研究を紹介しました。全く手法の異なる複数の先端研究を同時に紹介するという趣旨の学術シンポジウムということで、どの講演も非常に高度で、参加された多くの方にはなじみの少ない内容であったにもかかわらず、会の最後に設けられた質疑応答の時間だけでなく会の終了後にも多くの質疑や議論がなされ、会は盛況のうちに閉じました。



天野 薫 先生



竹村 浩昌 先生



寺尾 将彦 先生



時間学特別セミナーを開催

2017年3月24日、広島大学大学院理学研究科教授の山本卓先生をお招きして、吉田キャンパス総合研究棟3階フォーラムスペースにおいて時間学特別セミナー「ゲノム編集の原理と様々な分野での可能性」を開催しました。ゲノム編集とは、核酸分解酵素によるDNA切断とその修復時に生じるエラーを利用した遺伝子改変技術であり、既存の技術と比べてはるかに短期間かつ簡易に遺伝子改変を実施できるのが特徴です。現代の生物学においてまさに必要不可欠な実験手法となりつつあります。山本先生は同研究領域において国際的に御活躍されており、本セミナーではゲノム編集の基礎から応用に至る話題について幅広くご講演頂きました。具体的には、御自身の研究フィールドを発生生物学からゲノム編集開発へと転換された経緯や、TALENをはじめとする独自に開発された数々のゲノム編集技術についての詳細な御説明、さらに、その際に御経験された激しい国際競争などについても拝聴することができました。さらに、二種類のゲノム編集技術（CRISPRとTALEN）における双方のメリットについて比較しながら、両者の現状の問題点と今後の開発展望についてもお話して頂きました。講演会終了後は、細部にわたる技術的なアドバイスを頂くことができました。



第18回サロン時間学を開催

2017年3月24日、山口大学吉田キャンパス総合研究棟にて弊所の月例会「サロン時間学」を開催しました。第18回目となる今回は、山口大学教育学部・岡村康夫先生をお迎えし、「シェリング哲学の躓き（つまづき）」と題してお話しいただきました。ドイツ観念論というきわめて正統な学的系譜に属するシェリングが、近代西洋哲学の語彙では語りえない、つまり哲学者が「沈黙」を要請されるような宗教的次元・思弁が含む哲学的意義を重視していたこと、なおかつそれをどこまでも純哲学的な様式で思索し言語化しようとしたことを、45年間の沈黙時代に書かれたテキスト『世界時代』の3つの草稿の異同から緻密に検証することで、一般に「躓き」と評されるこの時代のかれの仕事を再評価した部分を中心に、最新のご著書（『シェリング哲学の躓き』昭和堂、2017

年）の内容を抜粋的に紹介いただきました。会に参加された多数の教職員の方々が（当日岡村先生からご寄



贈いただいた）当該書の輪読を行い、先生が逐次わかりやすく解説する、という形式で会は進められ、通常の回とはまた異なった、楽しく刺激的な集まりとなりました。

名称を

「時間学カフェ」

に変更しました。



当時の所長 甲斐昌一先生の発案で始まった『サロン時間学』。

『サロン時間学』とは、『知の交流と、創造』をコンセプトにした、普段あまり接する機会のない異分野の人たちと同じ時間を過ごす『お茶会』です。ただのお茶会ではなく話題提供者がいて話題提供者の話を聞きながら疑問に思ったこと、思いついた事をどんどん声に出してみる。そこから色々な発想に繋がっていく。そんな「何か発見できそうな」和気あいあいとした異分野交流を楽しむお茶会です。

「この話聞いてみたいけど、自分が行ったら場違いかも。。」「専門の話は出来ないのかな。。」なんて考えず、どうぞ顔を出してみてください。

お茶とお菓子を用意して、皆さまのお越しを心よりお待ちしております。

※開催予定は研究所ホームページへ掲載しています。

平成 29 年度

専任・兼務所員 客員教授・准教授 紹介

宇宙地球科学部門

【専任】

藤澤 健太（所長・教授）

青木 貴弘（助教（特命））

【兼務】

大和田 正明

（大学院創成科学研究科（理学）教授）

生命科学部門

【専任】

明石 真（教授）

【兼務】

岩尾 康宏

（大学院創成科学研究科（理学）教授）

谷澤 幸生（大学院医学系研究科 教授）

美津島 大（大学院医学系研究科 教授）

田邊 剛（大学院医学系研究科 教授）

【客員教授】

井上 慎一（時間学研究所 初代所長）

武藤 正彦（宇部興産中央病院 病院長）

近藤 孝男（名古屋大学 名誉教授）

心理学部門

【専任】

寺尾 将彦（助教（テニュアトラック））

【兼務】

小野 史典（教育学部 講師）

【客員教授】

一川 誠（千葉大学 教授）

工学部門

【兼務】

横川 俊哉

（大学院創成科学研究科（工学）教授）

長 篤志（大学院創成科学研究科（工学）教授）

【客員教授】

織田 一郎（時の研究家、首都大学 客員教授）

社会科学部門

【専任】

右田 裕規（副所長・准教授）

【兼務】

山本 晴彦（農学部 教授）

濱島 清史（経済学部 教授）

【名誉博士】

Michael I.Tribelsky（モスクワ大学 教授）

【客員教授】

辻 正二（保健医療経営大学 教授）

【客員准教授】

Brigitte Steger

（ケンブリッジ大学 准教授）

Serge A.Tishchenko

（モスクワ大学 准教授）

人文学部門

【兼務】

太田 聡（人文学部 教授）

森下 徹（教育学部 教授）

ヒンターエーダーニエムテ・フランツ

（人文学部 教授）

【客員教授】

Raji C.Steineck（チューリッヒ大学 教授）

数理学部門

【兼務】

鍛冶 静雄

（大学院創成科学研究科（理学）准教授）

【客員教授】

蔵本 由紀（京都大学 名誉教授）

【名誉博士】

Michael I.Tribelsky（兼）

（モスクワ大学 教授）

【客員准教授】

Jérôme Bolte（トゥールーズ第1大学 教授）

Serge A.Tishchenko（兼）

（モスクワ大学 准教授）

今後の予定

昨年まで「アフタヌーンセミナーin 福岡」と題して開催していたセミナーを、今年は「時間学公開講座 in 福岡『時間学への招待』」として開催します。

時間学研究所ではどのような研究が行われているのか、「時間学」の現在の姿はどんなものなのか、研究所の専任教員3人がそれぞれの研究について分かりやすく解説します。

11/11 (土)	藤澤 健太 教授 「宇宙の時間」
11/18 (土)	右田 裕規 准教授 「社会の時間」
11/25 (土)	寺尾 将彦 助教 「こころの時間」

場所：アクロス福岡（福岡市中央区天神1-1-1）

対象：どなたでも 先着 65 名（事前申込みが必要）

申込み方法

①氏名（代表者）②参加人数 ③住所 ④連絡先

①～④を明記の上、メール（sh076@yamaguchi-u.ac.jp）・

はがき・FAX いずれかでお申し込み下さい。

申込み締切：平成 29 年 10 月 31 日（火）必着

（定員に達した場合その時点で締め切ります）

書籍出版のお知らせ

『時間学の構築Ⅱ 物語と時間』

（恒星社厚生閣）時間学研究所 監修

「時間学の構築」シリーズ第2弾が刊行されました。

「物語性のない時間はあっても、時間制のない物語はない」（序論より）

『物語と時間』と題した本書は、文学研究、美学史、社会学、哲学の分野で活躍する研究者が「物語」という「時間とは切り離せない」テーマをもって論考を展開した論文集です。

序論

青山 拓央

I 哲学・美学的接近

山口 尚

平井 靖史

藤川 哲

II 文学・演劇論的接近

森野 正弘

高橋 大助

ヒンターエーダー＝

エムテ・フランツ

III 社会学・歴史学的接近

松浦 雄介

右田 裕規



時間学ミニ辞典

周期的時間と生物

生命進化に関与してきた因子は無数にあります。その中でも天体活動が生み出す「周期的時間」は、生命淘汰に関わる大切な環境因子だったと想像できます。地球の自転や公転によって、日の出や日の入りの時刻だけでなく気温や湿度なども周期的に変化しており、これに伴って生物をとりまく環境はダイナミックに変化します。このような環境の周期変化に対して、生物たちは受け身なのでしょうか。つまり、生体のホメオスタシス（恒常性）によって、環境変化に応答して体内環境を一定に保つことに終始しているのでしょうか。生命進化には競争原理が働きます。つまり、淘汰圧に耐えたものが結果的に繁栄します。だとすれば、環境の周期的変化を上手に利用できたものは、生存競争において優位だと想像できます。この利用の戦略として「備え」があげられます。例えば、冬が来るのを予測するように、一部の動物は備蓄をして、体は徐々に冬眠状態に入ります。備えがないと大変です。働き者のアリと違ってキリギリスは冬が来てから慌てても間に合いませんでした。この備えは2種類の方法に分けることができそうです。一つは、来たる自然界のイベントを予兆するような環境中の変化を感知して、生物が備えを始める方法です。先ほどの越冬の例では、気温の低下や日長の変化を感知して、越冬に必要な本能行動にスイッチが入るのでしょうか。もう一つは、予兆因子に依存せずに、体内に独自の計時機構を保持する方法です。この機構は「体内時計」とよばれており、仮に環境中の予兆因子の感知に失敗しても、自律的な計時機能のおかげで備えが可能となるのです。

（明石 真）